

「日本すごい!」の“文化外交”が浮き彫りにする、日本のいびつさ

池永記代美(ベルリン・女の会)

一年前には想像もできなかった米朝トップ会談が、6月にシンガポールで開かれました。北朝鮮外交を巡って日本は「蚊帳の外」に置かれたと、その外交力の弱さが指摘されています。ところがどっこい、日本は“文化外交”にはとても熱心です。

日本の観光庁は、五輪とパラリンピックが開かれる2020年には、訪日外国人観光客4千万人、その消費額8兆円を目標とする「Enjoy my Japan」キャンペーンを今年の2月に始動させました。欧米からの観光客を特に期待しているそうです。そこで毎年ベルリンで行なわれる観光見本市にあわせて、在ベルリン日本大使館は3月7日に「Japan Night」を開催し、招待した旅行関連業者たちに日本の伝統工芸や自然の素晴らしさを映像でPR、北海道直送の鮭を使った料理や日本酒を気前よく振る舞いました。しかし福島第一原発事故のその後や日本における英語の普及度など、ドイツの旅行業者が最も知りたいことの説明はありませんでした。日本の観光事情に詳しい人の話では、今の日本に4千万人の外国人観光客を受け入れるキャパシティはないそうです。現場の状況を見無視して観光庁の旗振りのもと、このキャンペーンは強引に進められているようです。



国際観光見本市にて。地方に観光客を呼びたいはずの観光庁だが、一番大きなブースを出していたのは東京都だった。

海外における“文化外交”の拠点は在外公館です。5月24日には、同じく在ベルリン日本大使館で、映画『杉原千畝』が上映されました。杉原千畝は第二次世界大戦中、リトアニアのカウナス領事代理を務めましたが、本省の訓命に背いてユダヤ人らにビザを発給し、約6千名の命を救ったといわれています。戦後、その行為を理由に杉原は退職勧告を受け、1947年に外務省を辞めました。国際社会では1980年代から氏の功績を讃える声が挙っていましたが、外務省が杉原の名誉回復を行なったのは氏の没後の1991年です。外務省は杉原に冷や飯を食わせた張本人ですが、この日の八木毅大使の挨拶に、杉原に対する謝罪の言葉はありませんでした。これはドイツではあり得ないことです。会場にはベルリンに住むユダヤ系の人たちも招かれ、映画を見た知人の一人は感動して目に涙を浮かべていました。ユダヤ人たちの杉原への感謝の気持ちを利用して、杉原を海外で売り込める“日本の英雄”に仕立てようというのでしょうか。上映後は、またもや寿司や天ぷらでの歓待でした。



「杉原千畝」(東宝)のパンフレットは「ひとりの日本人が、世界を変えた」と謳う。それにしても、3年前の映画を、今、大使館が上映するのはなぜ?

過去の英雄は、“外交”の切り札というわけか、次に登場するのは、第一次世界大戦の敵国ドイツ兵を収容した徳島県坂東俘虜収容所の松江豊寿所長です。氏はハーグ条約に基づき捕虜たちを人道的に扱い、彼らの文化活動も認めていました。捕虜の楽団が1918年6月1日、ベートーヴェンの交響曲第九番を日本で初演したことは、よく知られています。今年がそれから100年目にあたるのを祝って、日本から自衛隊の楽団がわざわざ訪独し、各地で第九を演奏して回りました。これも正義の人、松江所長をアピールするためのようです。松江所長が捕虜を大切にしたのは、軍の指示があったわけではなく、朝敵会津藩出身のため軍の中で苦労したという自身の経験からでした。個人の功績を勝手に“日本”の手柄にしてしまうという構図は、杉原千畝のケースと同じです。記念日の6月1日、自衛隊はベルリンの大使館や中央駅で演奏しましたが、第九以外の曲目は軍国主義的なマーチや、ドイツでは誰も知らない1964年の東京五輪のファンファーレなど。共演したドイツ連邦軍の楽団のジャズやポップ・ミュージックに比べて、日本側の時代錯誤的選曲が目立ちました。



ベルリン中央駅の演奏のシメは、まさかのドイツの国歌と君が代。ドイツでは日頃国歌を聞くことはないので、かなり違和感あり。

これら3つの例から見て取れるのは、日本政府が自分たちに都合のよい人物や出来事をクローズアップして、「日本は素晴らしい」、「日本人は立派」というイメージを海外で押し売りしていることです。しかしどれもどこかの外れ。本来の外交での失敗や、海外での「慰安婦」像設置にコソコソ、しかし執拗に介入していることを思い合わせると、この“文化外交”にこそ、日本のいびつで醜い面がよく現れているように思えます。(写真撮影: いずれも筆者)